

Title	巻頭のことば
Author(s)	小倉, 義明
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume25, 2010.3 : 1-2
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3254
Rights	

SERVE

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

巻頭のことば

堂目卓生著『アダム・スミス』(中公新書)を読んだ。サントリー学芸賞を受賞してから、版を重ねているらしい。専門家が学問的研究の意図をこめて書き、しかも素人でも読みうるような平易さを併せ持つ、魅力的な本である。

この本の特徴はもう一点、副題(『道徳感情論』と『国富論』の世界)が示しているように、前者を後者の思想的基盤として捉え、両者をもつてスミスの思想体系として構築する点である。『道徳感情論』はスミスの倫理学で、『国富論』は経済学だと言いうるとすれば、倫理が経済の根底をなしているとスミスは考えていたと言えよう。これは、スミス理解の点から言っても、経済倫理の可能性の点から言っても大いに賛意を表したいところだ。

*

著者の堂目教授は「あとがき」の中で、本書執筆の動機の一つとして、ジョン・ロールズの正義論やアマルティア・センの経済倫理学などから影響を受けていた、と書いている。大江健三郎もアマルティア・センとの往復書簡の中で、一九九〇年代のバブル崩壊期を念頭に、金融界をはじめ日本社会に広がるモラル・ハザードについて言及した。セン教授は返信の中で、経済の中でモラル・ハザードは重大な問題だ、金融のような「閉じた世界」に起こりやすく、その対策のためには「競争と競争促進につながる規律を奨励することが重要」と言う。競争は、他者の競争する権利を認めるという意味で、道徳的価値観であるが、そればかりでなく、閉じた世界に起こりがちな

「縁故」や「なれ合い」、「放漫」を矯正する役割を果たす、と言う（大江健三郎『暴力に逆らって書く——大江健三郎往復書簡』朝日新聞社）。経済にとつて倫理が重要だ、という指摘である。大江氏とセン教授の往復書簡から満十年経った今日では、米国証券・金融の大破綻を目の当たりにし、その影響を直接に受けている私たちとしては、経済倫理の重要性は一層声高に語られてしかるべきであろう。

*

おわりに、もう一度堂目教授の著書について、「専門家が学問的研究の意図をこめて書き、しかも素人でも読める平易さを併せ持つ」と評した点に立ち戻る。ミルトン・フリードマンの『資本主義と自由』（日経BP社）も経済学の教科書として五十年間世界中で読み続けられてきている。この本は、学問的に開拓的な著述でありつつ、入門書、標準書でもありうるという可能性を示している典型であろう。その可能性があることに希望をもって、私たちも各々の分野で励んでゆこうと思う。